

# 健康統計学 第4回

今回は、相関と回帰（テキスト33～44ページ）について学習します。

## テキスト

- 『やさしい保健統計学 改訂第4版』 縣 俊彦著 (南江堂)

## 今回の内容

1. [相関](#)
2. [回帰](#)
3. [Excelで相関係数と回帰直線を計算](#)
4. [Excelで散布図と回帰直線を作成](#)

# 相関 (correlation)

2種類のデータのあいだになんらかの関係がある場合、統計学的な関係性がみられるときに、「相関がある」や「相関関係がある」といいます。

- データの大小に関して、一方の値が変わるにつれて、もう一方の値も変わる
  - 身長と体重
  - 収縮期血圧と拡張期血圧

## データの尺度と相関関係

データを大雑把に、量的データ（比例尺度、間隔尺度）と質的データ（順序尺度、名義尺度）に分けるときに、データの尺度によって、相関関係を表す指標は異なります。次の表を参考にしてください。

2つのデータの尺度	相関関係を表す指標
量的データ×量的データ	ピアソンの積率相関係数
順位データ×順位データ	スピアマンの順位相関係数
量的データ×質的データ	相関比
質的データ×質的データ	クラメールの連関（関連）係数

この授業では、よく利用される、ピアソンの積率相関係数とスピアマンの順位相関係数を扱います。

## 相関係数 (correlation coefficient)

### 相関の種類

- 線形相関: 相関(関係)を示すグラフ(散布図)が1本の直線で近似できる
  - 順相関: 相関が正の場合(散布図が右肩あがりの傾向)
  - 逆相関: 相関が負の場合(散布図が右肩さがりの傾向)
  - 無相関: 相関がない場合(散布図がまばらになっている)
- 非線形相関: 相関を示すグラフが指数関数や2次・3次関数のように曲線状になる

### 偏差積和

- 偏差積和(偏差の積和)  $S_{xy}$  とは、偏差(各データと平均の差)の積の総和である。

$$\begin{aligned} S_{xy} &= \sum_{i=1}^n d_x d_y \\ &= \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y}) \end{aligned}$$

- 標本数:  $n$
- 偏差:  $d_x, d_y$

### 相関係数 (ピアソンの積率相関係数)

- 相関係数(ピアソン(Pearson)の積率相関係数)  $r$  は、相関の程度をあらわし、次の値をとる。  
(一般に相関関数といえばコレ)

$$-1 \leq r \leq +1$$

- 完全相関: 相関係数が  $\pm 1$  の場合

○ 無相関: 相関係数が0の場合

• 相関係数  $r$  は、次の式で求められる

$$\begin{aligned} r &= \frac{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{s_x s_y} \\ &= \frac{1}{n} \frac{S_{xy}}{s_x s_y} \end{aligned}$$

○ 標本数:  $n$

○ 標準偏差:  $s_x, s_y$

○ 偏差積和:  $S_{xy}$

• または、次の式でも求められる(統計量だけから計算できる)

$$\begin{aligned} r &= \frac{1}{s_x s_y} \left( \frac{\sum x_i y_i}{n} - \bar{x} \bar{y} \right) \\ &= \frac{1}{s_x s_y} \left( \frac{T_{xy}}{n} - \bar{x} \bar{y} \right) \end{aligned}$$

○ 積和(2変数の積の合計):

$$T_{xy} = \sum_{i=1}^n x_i y_i$$

## 共分散 (covariance)

---

• 共分散  $s_{xy}$  は、偏差積和を標本数で割ったもの。

$$\begin{aligned} s_{xy} &= \frac{1}{n} S_{xy} \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y}) \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n d_x \cdot d_y \end{aligned}$$

○ 標本数:  $n$

○ 偏差:  $d_x, d_y$

• 共分散  $s_{xy}$  を使うと、相関係数は次のように表せる。

$$r = \frac{s_{xy}}{s_x s_y}$$

## 偏差平方和

---

• 偏差平方和  $S_{xx}$  は、偏差の二乗の合計を計算したもの

$$\begin{aligned} S_{xx} &= \sum_{i=1}^n d_x^2 \\ &= \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2 \end{aligned}$$

•  $x$  と  $y$  についての偏差平方和  $S_{xx}$  と  $S_{yy}$  を使うと、相関係数は次のように表せる。

$$r = \frac{S_{xy}}{\sqrt{S_{xx}S_{yy}}} = \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sqrt{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2 \sum_{i=1}^n (y_i - \bar{y})^2}}$$

## 相関関係と因果関係

### 相関関係から因果関係を確定するときの注意点

何でもよいから2組のデータの関係性を調べればよいわけではありません。次のような5つの因果関係が認められる場合に、相関関係を調べることが有効になります。

1. 関連の時間性
  - 原因は結果の前にあるか
2. 関連の密接性
  - 原因が結果に密接に関連するか
3. 関連の特異性
  - 原因が結果にどの程度かかわっているか
4. 関連の普遍性
  - 対象や時期、方法などが異なっても、類似した結果が得られるか
5. 関連の合理性
  - 従来の理論や経験から考えて矛盾がないか

### 疑似相関（見かけの相関）

直接の相関はないが、**何かある要因が2つの事象と相関している**ために、2つの事象に相関がみられるケースがあります。

このような場合を「**疑似相関**」といいます。つまり、相関関係があるからといって、それが必ずしも因果関係であるとは限らない場合です。

- 「ビアホールでの生ビールの売り上げ数」と「アイスクリーム店のお客の数」
  - 2つの事象には「気温」「天候」などが相関している
- 「進行性の疾患をもつ患者の疾患についての知識」と「その疾患の進行度」
  - 2つの事象には「疾患の内容」「治療期間」などが相関している

### 相関の程度

相関係数の値から、相関の程度を次のように記述できます。

-1.0	相関係数 $r < -0.7$	強い負の相関
-0.7	相関係数 $r < -0.4$	かなりな負の相関
-0.4	相関係数 $r < -0.2$	やや負の相関
-0.2	相関係数 $r > 0.2$	ほとんど相関がない
0.2	相関係数 $r < 0.4$	やや正の相関
0.4	相関係数 $r < 0.7$	かなりな正の相関
0.7	相関係数 $r < 1$	強い正の相関

なお、標本数が少ない場合は、母相関係数の推定や検定（後日説明）が必要となります。

## 順位相関係数（rank correlation coefficient）

相関がない場合や順位に意味がある・順位だけしかわからない場合には、順位データ（データを小さいほうから並べた順位）をもとに、相関を求める方法が有効になります。

- 英語のテストの順位と数学のテストの順位の間
- 2つの銘柄の株価の相関（経済分野）
- 薬と奇形児発生の相関（医学分野）

また、順位尺度のデータだけでなく、比例・間隔尺度のデータについても何らかの順位を求めることで適用できます。

- スピアマン (Spearman) の順位相関係数  $r_s$  は、相関係数と同様、次の値をとる。

$$-1 \leq r_s \leq +1$$

- 同一順位の場合は、次のように扱う（平均順位）
  - 2位が2つある場合：2位と3位の中間  $(2+3)/2=2.5$ 位を順位とする
  - 4位が3つある場合：4位と5位と6位の中間  $(4+5+6)/3=5$ 位を順位とする
- 順位相関係数は、次のようにして求められる。

$$r_s = 1 - \frac{6 \sum_{i=1}^n d_i^2}{n^3 - n}$$

- 標本数:  $n$
- $i$  番目の順位差:  $d_i$

データ1の順位	データ2の順位	順位差 $d$	順位差の二乗 $d^2$
$x_1$	$y_1$	$d_1 = x_1 - y_1$	$d_1^2$
$x_2$	$y_2$	$d_2 = x_2 - y_2$	$d_2^2$
$x_3$	$y_3$	$d_3 = x_3 - y_3$	$d_3^2$
...	...	...	...
$x_n$	$y_n$	$d_n = x_n - y_n$	$d_n^2$
計		0	$\sum_{i=1}^n d_i^2$

# 回帰 (regression)

データをもとに、ある変数（**従属変数**または**目的変数**）を別の変数（**独立変数**または**説明変数**）で予測する式を作るための統計的手法を、「**回帰分析**」（regression analysis）といいます。

とくに、独立変数が1つだけの場合を**単回帰分析**といいます。複数の独立変数で1つの従属変数を予測する場合は**重回帰分析**といいます。

## 回帰直線 (regression line)

### 回帰直線

- 散布図の各点  $(x_i, y_i)$  が近くに分布するような直線を回帰直線という。

$$y = ax + b$$

- 回帰係数(回帰直線の傾き):  $a$
  - 回帰直線のy切片 ( $x=0$  のときのyの値):  $b$
  - 独立変数(説明変数: 予測に使う変数):  $x$
  - 従属変数(目的変数、基準変数: 予測したい変数):  $y$
- なお、回帰式は必ず  $(\bar{x}, \bar{y})$  を通る

### 最小二乗法 (least squares method)

- 観測値(または実測値)  $y_i$  と推定値(または予測値)  $\hat{y}$  との差(残差  $\epsilon$ )の二乗が最小になるような  $a$  と  $b$  を求める。
- 次の値が最小となるような  $a$  と  $b$  を求める。

$$\sum_{i=1}^n (y_i - \hat{y}_i)^2$$

- 残差の二乗  $\epsilon^2$  を足したものを、残差平方和  $S_\epsilon$  という

$$S_\epsilon = \sum \epsilon^2 = \sum_{i=1}^n (y_i - \hat{y}_i)^2$$

## 回帰式の計算

- $x$  を独立変数(横軸)、 $y$  を従属変数(縦軸)としたときの回帰式( $y$  への  $x$  からの回帰式)は次のようになる。

$$y = r \cdot \frac{s_y}{s_x} x + \left( \bar{y} - \frac{s_{xy}}{s_x^2} \cdot \bar{x} \right)$$

- なお、回帰式を  $y = ax + b$  とすると、 $a$  と  $b$  は次のようになる。

$$a = r \cdot \frac{s_y}{s_x}$$
$$b = \bar{y} - \frac{s_{xy}}{s_x^2} \cdot \bar{x} = \bar{y} - \bar{x}a$$

- 相関係数:  $r$
- 2変数の標準偏差:  $s_x, s_y$
- 2変数の共分散(偏差積和の平均)

$$s_{xy} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})$$

- 回帰式を変形すると、次のようになる。

$$\begin{aligned} y - \bar{y} &= \frac{s_{xy}}{s_x^2} (x - \bar{x}) \\ &= \frac{S_{xy}}{S_{xx}} (x - \bar{x}) \end{aligned}$$

- 2変数の平均値:  $\bar{x}, \bar{y}$
- 2変数の偏差積和:  $S_{xy}$

$$S_{xy} = \sum_{i=1}^n d_x \cdot d_y = \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})$$

- 偏差平方和:  $S_{xx}$

$$S_{xx} = \sum_{i=1}^n d_x^2 = \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2$$

## 標準誤差 ( standard error )

- 予測値と実測値のずれ(予測値の誤差; 残差  $\epsilon$ ) にちて考える

$$\hat{y} = ax_i + b + \epsilon$$

- 残差の標準偏差を、標準誤差  $s_\epsilon$  という

$$\begin{aligned} s_\epsilon &= \sqrt{\frac{\sum_{i=1}^n (y_i - \hat{y})^2}{n-2}} \\ &= \sqrt{\frac{S_\epsilon}{n-2}} \end{aligned}$$

- $n-2$  で割っているのは、2つの係数を推定したことによる自由度(後日説明)の修正のため

## 決定係数 ( coefficient of determination )

- 相関係数の二乗を決定係数(または寄与率)  $R^2$  という。

$$\begin{aligned} R^2 &= \left( \frac{1}{n} \frac{S_{xy}}{s_x s_y} \right)^2 \\ &= \frac{S_{xy}^2}{n^2 \cdot s_x^2 s_y^2} \\ &= \frac{S_{xy}^2}{\sum (x_i - \bar{x})^2 \sum (y_i - \bar{y})^2} \\ &= \frac{S_{xy}^2}{S_{xx} S_{yy}} \end{aligned}$$

- 偏差平方和と残差平方和を使うと、次のように書くこともできる

$$\begin{aligned}
 R^2 &= \frac{S_{\hat{y}y}}{S_{yy}} \\
 &= \frac{\sum (\hat{y}_i - \bar{y})^2}{\sum (y_i - \bar{y})^2} \\
 &= 1 - \frac{S_e}{S_{yy}}
 \end{aligned}$$

- 決定係数は、0から1の値をとる。

$$0 \leq R^2 \leq 1$$

- 推定(回帰式)の精度を表す指標である

- 「従属変数  $y$  の分散の何%を予測値  $\hat{y}$  の分散が説明しているか」を示す
  - 別の言い方をすると、「説明変数が従属変数の何%にあたる部分に影響を与えているか(寄与しているか)」を示す
- だいたい、0.5以上であれば精度が高いといえる

## 回帰の概念

- 予測値  $\hat{y}$  と従属変数の平均  $\bar{y}$  との差は、一般に独立変数  $x$  とその平均  $\bar{x}$  との差より小さくなる
  - 予測値と平均の差  $(\hat{y} - \bar{y})$  との差は、独立変数と平均の差  $(x - \bar{x})$  との差より小さくなる
  - 予測値は独立変数に比べて平均に近づく
- 統計学的な現象で、「回帰効果」や「平均への回帰」ともいう
  - (例)1回目の試験の結果が偏っていた(とくに良い、悪いなど)人について、2回目の試験結果を調べると、その平均値は1回目の結果よりも1回目の全体の平均値に近くなる(時間的には逆で考えてもよい)
  - (例)父親と子どもの身長を比較して、とくに身長の高い父親でも、とくに身長の低い父親からでも、子どもたちの身長は父親たちの身長より平均に近くなる
  - (例)とくに身長の高い人たちの父親の身長は、子どもたちの身長よりも平均に近い(全体の身長の分布は、父親たちも子どもたちも同じ)



# Excelで相関と回帰を計算

## 相関を計算

### 相関係数

- 2つの配列データの相関係数は、**CORREL**関数を利用します。

#### **CORREL(相関係数の値を返す)**

- 書式 : CORREL(配列1, 配列2, ...)
- 引数 : 配列1 ... : データが入力されたセルの範囲
- 引数 : 配列2 ... : もう一方のデータが入力されたセルの範囲
- 例 : データがA1～A10セルとB1～B10までのセルの数値から、相関関数を計算する

```
=CORREL(A1:A10, B1:B10)
```

- ピアソンの積率相関係数は、**PEARSON**関数を利用します。

#### **PEARSON(ピアソンの積率相関係数 r の値を返す)**

- 書式 : PEARSON(配列1, 配列2)
- 引数 : 配列1 ... : 独立変数に対応するセルの範囲
- 引数 : 配列2 ... : 従属変数に対応するセルの範囲
- 例 : 独立変数がA1～A10セル、従属変数がB1～B10までのセルの数値から、積率相関関数を計算する

```
=PEARSON(A1:A10, B1:B10)
```

- なお、Excel2004以降は、CORREL関数の結果とPEARSON関数の結果は同じになります。

### 共分散

- 共分散(2種類のデータ間での標準偏差の積の平均値)は、**COVAR**関数を利用します。

#### **COVAR(共分散の値を返す)**

- 書式 : COVAR(配列1, 配列2)
- 引数 : 配列1 ... : データが入力されたセルの範囲
- 引数 : 配列2 ... : もう一方のデータが入力されたセルの範囲
- 例 : データがA1～A10セルとB1～B10までのセルの数値から、共分散を計算する

```
=COVAR(A1:A10, B1:B10)
```

### 偏差平方和

- 偏差平方和(標本の平均値に対する各データの偏差の平方和)は、**DEVSQ**関数を利用します。

#### **DEVSQ(偏差平方和の値を返す)**

- 書式 : DEVSQ(数値1, 数値2, ...)
- 引数 : 数値1, 数値2 ... : データが入力されたセルの範囲
- 例 : データがA1～A10セルのセルの数値から、偏差平方和を計算する

```
=DEVSQ(A1:A10)
```

## 回帰を計算

### 回帰直線の傾き

- 既知の y と既知の x のデータから回帰直線の傾きには、**SLOPE**関数を利用します。

#### SLOPE(回帰直線の傾きを返す)

- 書式 : SLOPE(配列1, 配列2)
- 引数 : 配列1 ... : 既知の y(従属変数)に対応するセルの範囲
- 引数 : 配列2 ... : 既知の x(独立変数)に対応するセルの範囲
- 例 : 既知の y(従属変数)がA1 ~ A10セル、既知の x(独立変数)がB1 ~ B10までのセルの数値から、回帰直線の傾きを計算する

```
=SLOPE(A1:A10, B1:B10)
```

### 回帰直線のy切片

- 既知の y と既知の x のデータから(線形)回帰直線のy切片には、**INTERCEPT**関数を利用します。

#### INTERCEPT(回帰直線の切片を返す)

- 書式 : INTERCEPT(配列1, 配列2)
- 引数 : 配列1 ... : 既知の y(従属変数)に対応するセルの範囲
- 引数 : 配列2 ... : 既知の x(独立変数)に対応するセルの範囲
- 例 : 既知の y(従属変数)がA1 ~ A10セル、既知の x(独立変数)がB1 ~ B10までのセルの数値から、回帰直線のy切片を計算する

```
=INTERCEPT(A1:A10, B1:B10)
```

### 決定係数

- 既知の y と既知の x のデータからR<sup>2</sup>(決定係数)を求めるには、**RSQ**関数を利用します。

#### RSQ(r<sup>2</sup>の値を返す)

- 書式 : RSQ(配列1, 配列2)
- 引数 : 配列1 ... : 既知の y(従属変数)に対応するセルの範囲
- 引数 : 配列2 ... : 既知の x(独立変数)に対応するセルの範囲
- 例 : 既知の y(従属変数)がA1 ~ A10セル、既知の x(独立変数)がB1 ~ B10までのセルの数値から、決定係数 R<sup>2</sup>を計算する

```
=RSQ(A1:A10, B1:B10)
```